AG5だより

日本人学校・補習授業校を応援します！

在外教育施設の新しい取り組み―AG5プロジェクトの成果―

AG５運営指導委員会委員長・明治大学特任教授 佐藤 郡衛

文部科学省の委託事業である「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」（通称、AG５＝Advanced Global Fiveプロジェクト）を開始して２年が経過しようとしています。本欄では毎回、2018年度の取り組みを紹介してきましたが、改めてこの１年間のプロジェクトの成果を報告します。ＡＧ５ポータルサイト（https://ag-5.jp）もあわせてご覧ください。

教育の成果とは

この事業の成果をどのように把握するか、つまり評価についてまず説明します。みなさんは、評価の「工学的アプローチ」と「羅生門的アプローチ」という用語を聞いたことがあるでしょうか。Ｊ．Ｍ．アトキンという人が使い始めた言葉です。

「工学的アプローチ」とは、目標に基づいた評価を重視し、客観的な指標で行うことが目指されます。学力テストの結果などはその代表的なものです。これに対し「羅生門的アプローチ」とは、目標だけにとらわれない評価を重視します。定量的に見るだけでなく、教育の場でおきたさまざまなことを記述し、評価の材料に用います。例えば、レポートや感想文、日記などは客観的な指標では評価しにくいものです。また、異なる立場、複数の視点から評価していくことも必要です。「羅生門的アプローチ」の語源は、黒澤明監督の映画『羅生門』に由来するものです。この映画では、複数の目撃者が全く異なる証言をし、真相は観客に探らせる、という手法がとられています。まさに多様な視点や方法での評価が必要だということを示しています。

なぜこのような話をしたかというと、このプロジェクトでの取り組みは、一元的で客観的な指標だけではとらえられないためです。それぞれがどのような試みをして、どのような成果が上がったかを多面的、かつ多様な方法でとらえていく必要があります。私たちは、**(1)学校全体で取り組んでいるか、(2)教師の実践力の向上につながっているか、(3)子どもの学習成果が向上しているか、そして、(4)その取り組みを通したモデルカリキュラムやプログラムの開発ができたか**といった観点から成果をとらえることにしました。ただ、このプロジェクトでは、やはり四番目の「他の学校でも実践可能なモデルカリキュラムやプログラムを示すこと」が一番の目標です。

グローバル型能力育成のための教育支援―香港日本人学校香港校小学部の取り組み―

香港日本人学校香港校小学部では二〇一六年度に四年生のみで「グローバルクラス」をスタートさせ、その後、五年生、六年生へと対象を広げてきました。このクラスの特徴は、算数と理科の授業を英語で行うこと、学校独自の「グローバルスタディーズ」（世界的な課題について学期に一つのトピックで探究型の学習をするもの）を創り、そこで問題解決力、論理的思考力、表現力などの育成を目指すという点にあります。一八年度の取り組みと成果について、上記に挙げた「観点」に沿って報告します（以下、他校の取り組みにおいても同じ）。

（1）日本人学校の先生の多くは二、三年のサイクルで異動します。「グローバルスタディーズ」は学校独自の科目であるため先生方の共通理解が必要です。そこで全校あげてカリキュラム開発に関する研究授業と研究協議会を行いました。ＡＧ５のメンバーが香港に赴いて研修を実施、共通理解を得るようにしました。

（2）「グローバルクラス」は、国際バカロレアのＰＹＰ（Primary Years Programme）に準拠して構想したものです。授業の進め方、教材の作り方、評価方法など日本の教育とはやや異なるため、担当する先生方の研修は不可欠になります。そこで、日本国内の探究型学習や国際バカロレアを取り入れている東京学芸大学附属大泉小学校、ぐんま国際アカデミー初等部、東京学芸大学附属国際中等教育学校、聖ヨゼフ学園小学校などを訪問し、授業参観や国内の学校の先生方との話し合いの場を作り、グローバルクラスのカリキュラム開発、英語教育の向上、イマージョン

教育などの取り組みの参考になるような研修を実施しました。

（3）まず客観的な指標としては、グローバルクラスの子どもの学力テストの結果に注目します。標準学力検査であるCRT（Criterion Referenced Test）の五、六年生のグローバルクラスの結果は、国語、社会はもちろん、英語イマージョンで学習している算数と理科においても、全国テストの平均値より高い数値が得られました。また一七年度の一学期から三学期にかけて、グローバルクラスの四、五年生のほとんどの子どもの英語の読解力が向上しています。しかもアンケートの結果からも、英語の成長を実感している子どもが多くなっています。

（4）「グローバルスタディーズ」のプログラムの改善と開発を共に行いました。例えば四年生の「限られた資源としての水」では、理科、算数、家庭科等との教科横断的な学びを取り入れたり、四年生で学んだ「多様性」についての概念を、五年生での「環境と持続可能な社会」において深める等、学年にまたがる単元構成、評価法、指導法の見直しを行いました。同時に、「グローバルスタディーズ」の単元の体系性を検証し、他の学校でも参考になるようにしました。

二つの言語能力を向上させるための支援―台北、台中、高雄日本人学校での取り組み―

台湾の三校の日本人学校には、国際結婚家庭の子どもが多く在籍しています。こうした子どもたちの中国語能力を活かしつつ、教科学習についていくための日本語能力を育成することで、二言語能力を持つ人材育成を図ることが取り組みの目標です。

（1）台北日本人学校は小学部一、二年生に焦点をあて、教科学習についていくための日本語力を向上させることを目指しています。台中日本人学校は一～六年生を対象に、学校全体で日本語指導と教科指導を統合した授業改善に取り組んでいます。高雄日本人学校は現地校内で学校経営を行っていることを生かし、その現地校との語学指導を含めた交流のさらなる発展に力を注いでいます。

（2）日本人学校での日本語指導は、指導経験がない先生が多く、手探りで取り組んでいるのが実情です。そこで一八年度も引き続き、日本国内の学校での研修を実施しました。神奈川県横浜市と東京都豊島区の小学校では日本語の取り出し授業を参観、先生方との話し合いを通して個々の子どもへの指導の進め方について考えるきっかけにしていただきました。

（3）日本語力がどの程度向上したかを客観的に把握するまでにはいたっていません。ただ、子どもの日本語・中国語の語彙チェック、日本語力の測定をもとに、どのようなプログラムが適切かをこの二年間で検討してきました。子どもの実態がわからないまま指導したのではその効果も期待できません。そこで日本国内で開発された「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA（Dialogic Language Assessment）」を活用しました。今後、開発したプログラムで実践を行い、日本語力がどの程度向上するかを検証していきます。

（4）台北日本人学校の取り組みをもとにして、小学一～二年生用の日本語補習授業用のプログラムを開発しました。台北日本人学校の実践をもとにしていますが、そこから一般化を図り他の日本人学校でも活用できるようなプログラムの開発を目指しています。台中日本人学校では、日本人学校の子どもがつまずきやすい単元について、指導計画と教師の支援策を示したものを作成しました。また高雄日本人学校では、現地校に日本語指導を行う際の日本語教材について改訂を行いました。

英語力と日本語力の向上を目指すための支援―ダラス補習授業校の取り組み―

ダラス補習授業校でのプログラム開発を継続しましたが、オースチン、クリーブランド、コロンバス（OH）、シカゴ、シンシナティ、セントルイス、ワシントンの各補習授業校とも協力して、プログラム開発と授業実践を進めました。

（1）ダラス補習授業校では学校あげて取り組んでいます。学年別に三つの部会で学習指導計画の作成を行っており、高等部ではシンシナティ補習授業校との交流授業を実施しました。

（2）もともとダラス補習授業校では熱心に研修を行っていましたが、このプロジェクトで研修にも拍車がかかりました。国内から担当するプロジェクトメンバーが赴き研修を開催しました。また八月には、「多様な児童生徒が一緒に楽しく日本語を学ぶ授業づくり」というテーマで、オースチン、シンシナティ、コロンバス（OH）の補習授業校の先生も交えて合同の研修会を実施しました。

（3）成果の評価について研修を行いました。補習授業校では、日本語での学習に意欲をもって参加するこ

と、学習した内容を日本語で発表できるようになることが大きな目標になります。発表内容について、「ルーブリック」（学習の到達度を示す観点と尺度をあらわすもの）をもとにした評価を補習授業校でも行えるようにしました。各学年の取り組みからも、日本語が不得意な子どもたちも楽しく授業に参加し、調べ学習や発表活動に一生懸命取り組んでいる様子が保護者からも報告されています。

（4）四年生では「写真と文で活動を伝えよう」、五年生では「一枚の写真から」、六年生では「未来をよりよくするために」という単元開発を行いました。子どもの思考力や想像力を高め、それを表現するという取り組みです。この学習指導案を公開し、他の補習授業校でも実践できるようにしました。また、高等部ではシンシナティ補習授業校との交流授業をTV会議で行い、今後に向けて複数の補習授業校高等部での交流授業の可能性を検証できたように思います。

日本型教育・日本語教育の発信の取り組み―アスンシオン日本人学校の取り組み―

アスンシオン日本人学校では、日系人とそのコミュニティに対して、日本語学習をはじめとする日本型教育や日本文化を発信する取り組みをこの二年間にわたり進めています。

（1）新しい学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の実現が重視されています。社会に開かれるとは、①学校が社会とのつながりを踏まえて目標を設定し、それを実現する教育課程を編成すること、②社会で生きていくために必要な資質・能力を育むこと、③地域のリソースを活用することがうたわれています。これは日本人学校でも同様で、地域や国との関わりなしに効果的な教育は期待できません。改めて学校と共通理解を図り、学校全体で取り組んでいただくようにしたいと思います。

（2）アスンシオン日本人学校とアスンシオン日本語学校との合同研修会を実施しています。日本人学校の先生が勤務外で日本語学校の支援をするのは容易なことではありませんが、工夫して実施しています。また一八年度は、アスンシオン日本語学校とイグアス日本語学校から三名の先生方が日本の学校の研修に参加し、日本語指導、国語や体育の指導法などについて学びました。

（3）日本語学校の子どもの日本語力が向上すること、日本文化への関心が高まること、日本との関わりが強まることなどが指標になります。今年度は、日本語学校で「書道」を通した日本文化への関心を高める指導を行っていますが、残念ながら成果の評価までは行っていません。次年度の課題にしたいと思います。

（4）アスンシオン日本人学校において、「移住すごろく」の開発を行いました。日本人学校、日本語学校の両方で使える内容にしようと企画したものです。また一九年度には、日本人学校を中心に、日本語学校に通う日系人の子どもたちにも役立つ日系移民の歴史を織り込んだ社会科の副読本の開発を行う予定です。

日本文化等の発信の拠点形成の支援―西大和学園カリフォルニア校の取り組み―

西大和学園カリフォルニア校での取り組みは、学校図書館を日本文化や日本語の学習の場にして多様な活動を行うことで、親日的な人材を育成することがねらいです。前述の四つの取り組みと異なり、親日的な人材育成を目的としており、どの程度、学校のリソースを開放できているかが成果になります。一八年度は、まずは現地の交流校であるキャンベル・ホール・スクールの子どもの日本文化の理解の深まりを図るために、琴などの和楽器の演奏やお茶の披露などを行いました。つぎに、現地の人や保護者などに日本映画の上映会を開催し、関連する資料を提供しました。さらに現地の中学生が日系人の歴史を学ぶ資料がないため、全米日系人博物館、Go For Broke National Education Center、リトル東京サービスセンターと連携し、日英バイリンガルの教材の開発に着手しました。この他、近隣で日本語を教えているハイスクールの実態を調査し、日本語教育に関してどのような支援が必要かのニーズを把握しました。その結果に基づき、今後、必要な資料や情報を提供していく予定です。

今年度の取り組みに向けて

一八年度の成果についてはAG5のポータルサイトをご覧ください。一九年度は、香港日本人学校の取り組みはシンガポールやパリの日本人学校に、台湾で行ってきた日本語指導については青島、大連やマニラの日本人学校に広げていく予定です。補習授業校の取り組みはダラスを中心に広げていくほか、ロサンゼルス補習授業校高等部の支援も新たに行っていきたいと考えています。

詳細は一九年度の本欄で紹介していきますので、ぜひご期待ください。